

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370501

研究課題名(和文) 実例調査に基づくフランス語他動詞統辞機能研究—直接・間接他動構文の対立をめぐって

研究課題名(英文) On the opposition between direct transitive constructions and Indirect transitive constructions based on corpus

研究代表者

尾形 こづえ (OGATA, Kozue)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：90194422

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：フランス語において直接他動構文(N-V-N)と間接他動構文(N-V-a;-N / N-V-de-N)の両方が可能な基本動詞について直接・間接他動構文間の対立を大規模コーパスの検証に基づき、統辞と意味の観点から捉え、一つの動詞に可能な直接・間接他動構文間の対立に共通する傾向が存在しているかを探った。例えば croire N / que / inf (croire une histoire)と croire a N (croire au progres) にはどのような分布・統辞・意味上の違いがあるかを探り、croire a Nでは前置詞 a 固有の方向性の価値が構文を特徴づけていることを捉えた。

研究成果の概要(英文)：This research examines constructions of verbs which has, in modern French, both direct (N-V-N) and indirect transitive constructions with preposition a or de (N-V-a-N / N-V-de-N) from the point of view of the opposition between direct and indirect constructions. Two groups of verbs, those who have N0-V-N1 and N0-V-a-N1 as croire (N/a N), toucher (N/a N), atteindre (N /a N), penser( N/a N) and those who have N0-V-N1 and N0-V-de-N1 as approcher (N/de N), changer (N/de N), trahir (N/de N), parler (N/de N), juger (N/de N) have been studied from syntactic and semantic points of view based on observation of a large corpus. This study reveals that the special value attached to the preposition a, namely directionality, can be pointed out in indirect constructions of the verb N0-V-a-N1 examined in opposition with the direct constructions of the same verb N0-V-N1.

研究分野：フランス語学

キーワード：直接目的 間接目的 前置詞 a 前置詞 de

### 1. 研究開始当初の背景

フランス語において構文の中心をなす動詞に注目し、現代フランス語基本動詞の統辞構造と意味構造の関係を、大規模コーパスの検証に基づいて詳細に分析・記述することが研究全体の目指すところである。本研究では特に他動詞グループに注目し、そのうち直接・間接他動構文(特に à-N および de-N)の両方が可能な動詞に対象を限定する。このような他動詞一つ一つについて直接他動構文(N-V-N)・間接他動構文(N-V-de-N / N-V-à-N)間の対立を統辞と意味の観点から捉え、一つの動詞に認められる直接他動構文と間接他動構文間の対立に共通する傾向が存在しているか否かを大規模コーパスの検証に基づいて明らかにすることを目指している。

関連する国外の研究は以下の三つの研究分野に見られる。

一つは動詞研究の分野で、パリ東マルヌ・ラ・ヴァレ大学(Université Paris-Est Marne-la-Vallée)言語学科の Maurice Gross と Eric Laporte の研究グループによる網羅的な動詞構文の研究である。本研究の統辞特性の考察にはこの動詞構文研究が出発点となる。また、Jean Dubois(1997)による動詞の意味・統辞特性に基づく分類 *Les Verbes français* とこれに基づいて動詞の多義性を考察した Jacques François (2007) *Pour une cartographie de la polysémie verbale* があり、この二つの研究は意味分析と研究対象の限定の上で本研究の出発点となっているが、いずれも母語話者としての直感に基づくものであり、本研究の目指す対象構文の大規模コーパスの検証に基づく研究ではない。

二つ目はフランス語の前置詞研究である。個々の前置詞をめぐる研究(例えば、Ludo Melis (2003) *La préposition en français*, A. Jaeggi (1956) *Le rôle de la préposition et de la locution prépositive dans les rapports abstraits en français moderne*, 雑誌の特集 *La préposition en français I, II Modèles linguistiques* (2006) vol. 53. 54) には前置詞の用法全体の中で間接目的補語としての用法の記述がある。また、状況補語研究、例えば、L. Melis (1983) *Les circonstants et la phrase*, Rémi-Giraud, S. et André, R. (éd.) (1998) *Autour du circonstant* があり、これらは一つの前置詞の状況補語としての用法と間接目的補語としての用法との境界について理解を深める上では参考になる。しかしながらこれらの研究は、本研究の目指す直接他動構文との対立の研究ではない。

三つ目は他動性の研究である。例えばフランス語の他動性については A. Blinkenberg (1969) *Le problème de la transitivité en français moderne*, 言語全般を対象とした他動性研究

として Hopper, P. and Tompson, S. (1980) “Transitivity in Grammar and Discourse”, Valence 研究として G. Lazard (1994) *L'actance* がある。これらの研究では直接他動構文と他の可能な構文との対立が包括的に記述されており、フランス語、及び他言語の動詞の構文現象全体について理解を深める上では参考になるが、本稿の目指す直接他動構文と de または à を伴う間接他動構文との対立については充分掘り下げられていない。間接他動構文についての先行研究としては G. Moignet (1974) “Sur la « transitivité indirecte » en français”, 与格補語研究としては Van Langendonck, W. and Van Belle, W. (1998) *The Dative*, Vol 2. *Theoretical and contrastive studies* が参考になるが、いずれも本研究が目指す大規模コーパスの検証に基づく構文研究ではない。

### 2. 研究の目的

現代フランス語基本動詞の統辞構造と意味構造の関係を、構文の中心をなす動詞に注目し、大規模コーパスの検証に基づいて詳細に分析・記述することが研究全体の目指すところである。本研究では直接・間接他動構文(特に à-N および de-N)の両方が可能な動詞について直接他動構文(N-V-N)・間接他動構文(N-V-à-N / N-V-de-N)間の対立を統辞と意味の観点から捉える。この検証に基づいて一つの語彙単位である同一の動詞に認められる二タイプの構文(直接他動構文と間接他動構文)間の対立に共通する傾向が存在しているか否かを明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究では直接他動構文と間接他動構文の対立を捉える一つの方法として、一つの動詞に認められる直接・間接他動間の対立をコーパスの検証に基づいて考察し、このような構文間の対立に共通する傾向が存在しているかを明らかにすることを旨とする。対象とする間接目的は最も基本的で頻度の高い de +N と à +N に限定する。

考察対象とする動詞グループは次の方法で限定した。M. Gross の動詞構文研究を出発点とし、動詞構文辞典 Caput & Caput (1969), Busse, W. et Dubost, J.-P. (1977) を参照して、構文可能性を明らかにし、更に頻度を考慮に入れて頻度の高い構文の対に限定した。この観点から、approcher (ø/de), traiter (ø/de), parler (ø/de), juger (ø/de), croire (ø/à), toucher (ø/à), atteindre (ø/à), penser(ø/à) のような対の対立を考察する。例えば croire N / que / inf (croire une histoire, croire qu'il fait beau, croire partir) と croire à N (croire au progrès) にはどのような分布上、統辞上の違いがあるかを明らかにし、意味上の違いとの関連を探っていく。

これらの各動詞について、コーパスの検証に基づいて構文タイプ毎に分析、記述した。

このような分析の結果を次の方法で検証した。

第一の段階では一つの動詞に認められる直接・間接他動構文間の対立を分布の観点から捉える。着目点の一つは主語のタイプで、主語が人間に限定されている場合と、このような制約のない場合の統辞構造の特徴を各動詞について考察する。間接目的については限定辞の有無、また、名詞句の抽象・具体といった意味特性を記述する。このうち、抽象名詞に関しては動詞との派生関係の有無(例えば *croire au progrès / progresser*)も考察する。

第二段階では個々の動詞の直接・間接他動構文間の対立の考察に基づいて、このような対立から抽出した特徴に共通する傾向が認められるか否かを検証する。

#### 4. 研究成果

(1) 研究の第一段階として現代フランス語において両構文が可能な動詞の資料母体(未刊行)を作成した。

(2) 直接他動構文と *à*-N をとる間接他動構文が可能な高頻度の他動詞 *penser, croire* 等に注目し、実際の使用の中で統辞・意味の観点から直接他動構文(*penser sa politique*)と間接他動構文(*penser à ses amis*)の対立を検証した。

(3) 直接他動構文と *de*-N をとる間接他動構文が認められる高頻度の他動詞に注目し、*approcher, changer, juger, traiter* 等について直接他動構文(*changer une nappe*)と間接他動構文(*changer de nappe*)の対立を実例の中で検証した。

(4) (2) と (3) で直接他動構文と間接他動構文の対立について得られた研究成果を総括し、直接他動構文と *à* を伴う間接他動構文の対立と直接他動構文と *de* を伴う間接他動構文の対立をどの程度一般化できるかを検証した。

以下では(2)のうち、動詞 *croire, penser* の直接他動構文と間接他動構文の対立について得られた研究成果を具体的に報告する。

動詞 *croire* は現代フランス語の動詞使用頻度を調査した Baudot (1992)で 17 番目に分類されている基本動詞で、直接他動構文(N-V-N)と間接他動構文(N-V-*à*-N)の両方が可能である。パリ東マルヌ・ラ・ヴァレ大学言語学科の言語情報自動分析研究所 Laboratoire d'informatique Gaspar Monge (LIGM)の開発した言語自動分析システム *Unitex* を利用してフランスの日刊紙ル・モンド 1 年分から *croire* の使用例全 6812 を抽出し、日付順で最初の 834 例に絞ってコーパスを構築した。本研究の対象としない自動詞の用法、凝結表現を除いた構文の使用頻度の内訳は、直接他動構文が 583 例( $N_0 V que P$ (従属節): 459,  $N_0 V N_1$ : 61,  $N_0 le V$ : 55,  $N_0 V inf$ : 2,  $N_0 V$ (絶対構文): 2,  $V-N_0$ (挿入節): 4) に対し、*à* をともなう間接他動構文が 164 例( $N_0 V à N_1$ : 112,  $N_0 y V$ :

52) であり、この新聞のコーパスでは圧倒的に直接他動構文の方が高頻度であることが明らかになった。Jean Dubois による動詞の意味・統辞特性に基づく分類 *Les Verbes français*, 仏々辞典 *Trésor de la langue française* の記述を参照し、実例の詳細な分析を行った結果、直接他動構文  $N_0 croire (que P + Vinf + N_1)$  と間接他動構文  $N_0 croire à N_1$  の対立は次のように特徴づけることができる。まず、同じ形態の目的語  $N_1$  に注目すると、直接他動構文と間接他動構文間では  $N_1$  の制約に違いが認められる。直接他動構文は主語  $N_0$  が直接目的  $N_1$  (必然的に構築された命題の特徴をもつ)の表している内容について下す真・偽の判断を表している。*croire* の直接目的となる  $N_1$  は他の直接目的 *que P, Vinf* と同様、構築された命題を表している。名詞  $N_1$  が「+人間」の場合、 $N_1$  はこの人物そのものではなく、この人物が発言する、または行うことを指している。

*Dimanche, on a bien voulu croire Mary. Elle était si charmante dans ces certitudes d'adolescente. (Le Monde)*

名詞  $N_1$  が「-人間」、例えば *livre* 「本」の場合、 $N_1$  は本の実体ではなく、この本に書かれていることを表している。ここでこの命題に真と判断を下すには判断以前に命題が構築されている、または存在している必要がある。

他方、間接他動構文  $N_0 V à N_1$  の場合、 $N_1$  はすでに存在している具体的な存在、実現した事行を指すのではなく、存在する可能性、肯定的価値を指している(*croire au dragon, croire à la confiance*)。名詞  $N_1$  が「+人間」の場合、肯定的価値は主語  $N_0$  のこの人物、またはこの人物が行う可能性のあることに対する信頼を表す。名詞  $N_1$  が「-人間」、例えば *avenir* の場合なら、肯定的価値の可能性は主語  $N_0$  の将来に対する信頼感、未来がもたらしうるものへの信頼を表す。

動詞 *penser* も Baudot(1992)において頻度が 26 番目に分類されている基本動詞で、*croire* と同様、直接他動構文(N-V-N)と間接他動構文(N-V-*à*-N)の両方が可能である。言語自動分析システム *Unitex* を利用してル・モンド紙 1 年分から *penser* の使用例 5744 を抽出し、日付順で初めの 705 例に絞ってコーパスを構築した。自動詞の用法、凝結表現を除いた構文の頻度の内訳は、直接他動構文 554 例( $N_0 V que P$ (従属節): 353,  $N_0 V N_1$ : 22,  $N_0 le V$ : 29,  $N_0 V ce que P$ : 25,  $N_0 V N de N$ : 29,  $N_0 V inf$ : 63,  $V-N_0$ (挿入節): 20,  $N_0 V N_1 Attribut$ : 13) に対し、*à* をともなう間接他動構文 164 例( $N_0 V à N_1$ : 112,  $N_0 y V$ : 52)で、ル・モンド紙のコーパスでは明らかに直接他動構文の方が高頻度である。辞書 *Tresor* 及び、*penser* の構文に関する先行研究、Blinkenberg (1960), François (1998), Larjavaara (2009)を参照した上で、ル・モンドの資料、及び、 $N_1$  が同じ形態(*cela + ça*)の直接他動構文( $N_0 V-(cela+ça)$ )と間接他動構文( $N_0 V-à-(cela+ça)$ )については、

より大規模で主に文学作品のデータ・バンクである Frantext 中の 1960 年～2007 年に出版された 800 作品を対象として事例の詳細な分析を行った。(この内訳は以下である。 $N_0 V$  (*cela + ça*): 108 例 (*cela*: 59, *ça*: 49)/  $N_0 V à$  (*cela + ça*): 130 例 (*cela*: 52, *ça*: 78))

直接他動構文  $N_0 V$  (*cela + ça*) では *cela / ça* は  $N_0$  の思考内容そのもの(以下では前文の *vouloir vivre ce mois de juin plus longtemps*) である。

*J'aurais voulu vivre ce mois de juin plus longtemps et c'était la première fois que je pensais ça très clairement.* (Ernaux, A., 1977, p. 14)

一方, 前置詞 *à* が介在している間接他動構文  $N_0 V à$  (*cela + ça*) では  $N_1$ , つまり, 以下の *cela* は主語  $N_0$  が目指しているが達していない到達点を表している。 $N_0$  *pense à cela* は *cela* の指示対象 (*la chute du socialisme*) に対する主語  $N_0$  の思考の方向性によって強く特徴づけられている。

*Je pense à la chute du socialisme, je pense à cela et je regarde le ciel, de fin de journée, lumineux encore, rougi par endroits dans la direction où le rail nous emmène.* (Niel, J.-B., 1995, p. 46)

$N_1$  が共通の *cela/ça* のこの二構文の比較を基にして更に *penser* の用法全体で直接他動構文  $N_0$  *penser* ( $N_1 + V_{inf} + que P$ ) と間接他動構文  $N_0$  *penser à N\_1* の対立を捉えるとこれは次のように特徴づけることができる。

直接他動構文で動詞 *penser* は主語  $N_0$  が直接目的  $N_1$  の表している内容(構築された命題)の表象を与える過程を表している。*penser* の直接目的となる  $N_1$  は常に構築された命題の特徴を持っており,  $N_1$  が固有名詞である例 *C'est une façon de penser Bartok* に見られるように, この命題は各  $N_0$  により独自の方法で構築されている。

他方, 間接他動構文 ( $N_0 V à N_1 / N_0 V à V_{inf}$ ) において動詞 *penser* は  $N_0$  *pense à leur image* のような抽象的  $N_1$ ,  $N_0$  *pense à lui / au fleuve* のような具体的な  $N_1$  の指示対象に, また  $N_0$  *pense à fermer la porte* のような不定詞の場合は不定詞の表している事行に思考を向ける, 方向づける過程を表している。この構文に認められる「思考を方向づける過程」という価値はここに介在している前置詞 *à* に結びついている固有の価値の観点から捉えることができる。この前置詞は特に方向性を持った移動を表す動詞 (*aller, partir* etc) と共起すると「目指しているが達していない到達点」を表す。この到達点と発話時の  $N_0$  の状態の間の隔たりが前方に投影され,  $N_0$  *penser à N\_1* に思考の方向付けという価値を与えることができる。間接他動構文では前置詞 *à* 固有の「方向性位格」を構成する価値が構文を強く特徴づけている。

他方, (3) の間接目的 *de N* を含む間接他動構文と直接他動構文の対立 ( $N-V-N / N-V-de-N$ ) *changer*( $\emptyset/de$ ), *approcher* ( $\emptyset/de$ ),

*traiter* ( $\emptyset/de$ ), *parler* ( $\emptyset/de$ ), *juger* ( $\emptyset/de$ )等においては, 先述の前置詞 *à* の「方向性」ほど限定的ではないが, 前置詞 *de* の持つ価値が間接他動構文に果たしている役割が特徴的である。この点は更に多くの事例の検証に基づいて傾向を明らかにしているところである。また, ここで立てた仮説を今後より多くの動詞について, 大規模なコーパスによって検証する予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Kozue Ogata. *Attributs du verbe devenir : le cas des syntagmes prépositionnels  $N_0$  devenir Prep  $N_1$ .* in Vaguer, Celine (Edi) *Hommages à Danielle Leeman*. Lambert Luca. (2017) 査読あり(印刷中)

Kozue Ogata. *Opposition des compléments direct et indirect. le cas du verbe penser : les constructions  $N_0 V$  ( $N_1 + V_{inf}$ ) vs  $N_0 V à$  ( $N_1 + V_{inf}$ ).* 青山学院大学文学部 『紀要』 57 (2015) pp. 1-23. 査読なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

尾形 こづえ (OGATA, Kozue)  
青山学院大学 文学部・教授  
研究者番号: 90194422

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし